

建陽本「萬曆新歲」刊記考

磯部 彰*

About Colophons with publishing date of *Wan-li Sin-sui* in Ming Jian-yang imprints

ISOBE akira

(1) 建陽本「萬曆新歲」の刊記について

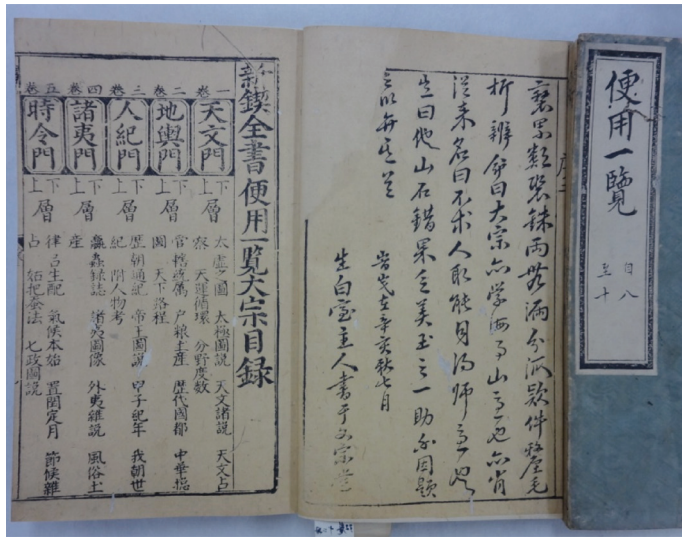
明後期、建陽地域は出版物の一大生産地となり、經学関係書から『三国志演義』などの口語小説まで、漢字文化に係わるすべてのジャンルの書籍を刊行したともいえる状況を作り出した。清代初期まで、建陽における出版活動は窺えるが、乾隆以降、主要な版元は蘇州などの都市に移り、それらの地域が中心的な出版活動を行なうようになる。その一方で、清代前期の江浙出版物の中には、建陽出版物の再刊物も含まれていて、その影響力は出版文化史上看過できない。

福建版坊刻本を代表する建陽版、いわゆる閩版の一つの特徴は、上図下文形式の版式の他、蓮牌木記などと呼ばれる刊記を持つことにある。宋代以降、多数の木版本が出版されるが、その出版日時は往々にして明瞭ではないことも多い。これに対し、建陽刊本は、蓮牌木記等の刊記を持ち、刊行時期を窺わせる年暦を記入するケースが多くある。書籍出版の時期は、とりもなおさずその書籍の内容が完成していたことを意味する。出版が盛んになった明代後期において、建陽本の刊記は、公私の書籍目録と並んで学統や作品の研究に重要な役割を果たす。

ところが、建陽本でも刊記の中に元号はあっても、その年次を示す干支がない場合がある。萬曆年間、建陽では多数の版本が、余氏や熊氏、劉氏、楊氏などの版元から出された。その出版物の中には「萬曆新歲」とする刊記があり、従来、これを萬曆元年刊本と位置づけていた。建陽坊刻本を鳥瞰すると、萬曆十年代後半以降のものが多いのに対して、萬曆元年前後の刊本は少ない。建陽書肆の全体の活動と比べて、萬曆新歲の刊記年代を元年とするのは、今日伝わる多くの建陽本から見て少し早いようにも思える。しかも、建陽の坊刻本には、相対的ではあるが萬曆三年とか、五年というものはあまり目にしないにもかかわらず、既存の蔵書目録の記載において、出版物が萬曆元年刊行に集中する点も奇異な感じがする。

筆者は、かつて、広島市立中央図書館浅野文庫の漢籍を調査し、図書館が新たに出した浅野文庫漢籍目録にある『新鍔京台輯訂全書使用一覽大宗』の解題で、建陽書林文宗堂黄氏の出版活動と当該書の「萬曆新歲」刊記が萬曆元年刊を意味しないことを指摘した（注1）。

* 東北大学名誉教授



(図版 1) 『新鐸京台輯訂全書使用一覽大宗』(広島市立中央図書館浅野文庫本)

更に、広島市立中央図書館の目録とは別に、浅野文庫漢籍図版類などを補足的に公表した際にも、「萬曆新歳」刊記を持つ版本の刊行年の問題について指摘した(注2)。その後、自説に対するいくつかの補強資料が眼に入った。このたび、明代出版史研究上、一つの看過できない問題として、建陽版本の刊記にある「萬曆新歳」が、従来考えられていたような萬曆元年を意味しない点を、建陽の出版活動を通して再度指摘しようとする。

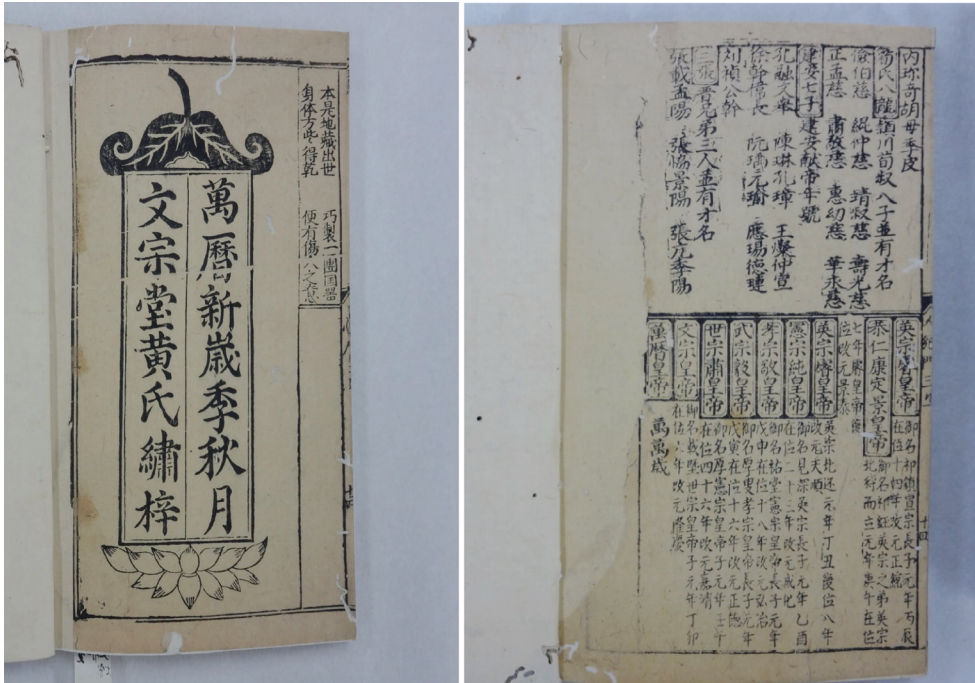
(2) 「萬曆新歳」刊記の解釈とその誤認

萬曆新歳とは、前の元号である隆慶を萬曆に改元した新しい最初の歳と見なしてもよいような書き方ではある。筆者も、当初、そのように考えていた。ところが、広島市立中央図書館浅野文庫本『新鐸京台輯訂全書使用一覽大宗』(図版1)に関連して、国立公文書館の旧内閣文庫に所蔵されるいくつかの明刊建陽本を調査した結果、疑念が生じた。

そのため、浅野文庫本『新鐸京台輯訂全書使用一覽大宗』の書誌紹介では、版元の文宗堂黄集義の活動について言及しつつ、「萬曆新歳」の解釈に一つの提言、つまり、萬曆元年ではないという指摘をした。その概要は、次の通りである。

『新鐸京台輯訂全書使用一覽大宗』は、明の萬曆年間、文宗堂黄集義が出版した通俗日用類書の一つ(注3)で、門目を一卷ごと32に分ける。

本書は、巻一卷頭に「漳南生白道人校正/書林集義黄氏鐫行」と記載され、卷三十二大尾の後には「萬曆新歳季秋月文宗堂黄氏繡梓」という蓮牌木記があることから、福建出身の生白道人が



(図版 2) 『新鐫京台輯訂全書使用一覽大宗』(同前) 蓮牌木記・卷 3 「萬曆皇帝」 項

校訂し、書林文宗堂が萬曆年間に刊行した日用類書である。生白道人の「小引」は萬曆辛亥秋七月の日付になっているから、刊記の萬曆新歳は萬曆元年ではなく、辛亥の歳、つまり、萬曆 39 年ごろの出版と見るべきであるが、確定年代は不明なために萬曆年間とした。なお、本書序文の作者は、「生白室主人書于文宗堂」とある。生白道人ではなく、生白室主人となっているが、おそらく、生白道人と生白室主人は同一人物であろう。

坂出祥伸氏は、上記の生白室主人(生白道人)が大谷大学神田文庫の『新鐫搜羅萬卷合併利用便覽全書』の序文を書き、序文末尾には「萬曆癸丑秋立生白室主人書于餘慶堂序畢」と、封面には「書林餘慶堂黃耀宇梓」と、第 1 冊本文には「福林黃耀宇精梓」との記載がそれぞれあることを示された。そして、序文により、『新鐫搜羅萬卷合併利用便覽全書』は、萬曆 41 (1613) の序刊とされた(注 4)。

書林餘慶堂黃耀宇についてはあとで触れることとし、まず問題とすべき点は、『新鐫京台輯訂全書使用一覽大宗』卷三十二大尾の後にある蓮牌木記「萬曆新歳季秋月文宗堂黃氏繡梓」中の「萬曆新歳」という記載である(図版 2)。一見、刊記から本書は萬曆元年刊本と錯誤しがちである。全書一覽大宗は先行する日用類書から作られたかもしれないが(注 5)、先行する日用類書が、萬曆元年以前に多種にわたって出版されていたとは思えない(注 6)。

一方、生白道人による「小引」は、辛亥秋七月の日付になっている。この「辛亥」は、萬曆

三十九年（1611）、或は、萬曆元年（1573）の出版であれば、その前の辛亥、つまり嘉靖三〇年（1551）が候補に上る。

本書が萬曆元年に出版されたと仮定した時、それより22年以前の嘉靖年間に序文が準備され、同じくその原稿が用意されたとしても、何らかの事情で刊行に到らずに歳月が経過し、萬曆元年に至って出版されたことになる。商業出版の利益を目指した商品という視点から考えると、そのような悠長な活動がなされたとは常識的には考えにくい。明代、多くの日用類書が萬曆後半に出版されたことを考えれば、萬曆三十九年（辛亥）の方がふさわしいように思える。

しかし、序文の日付と刊行年との間に20年以上の隔たりがあったとしても、原稿が用意される過程で、先に序文が準備され、刊行に到らずに歳月が経過した可能性も一応考慮すべきでもある。明代の日用類書の成立と出版は、それが社会に与えた影響にも跳ね返る事柄であるため、その出版が萬曆元年か否かは、本書の出版時期に止まらず、明代文化史でも看過できない事柄になってくる。

(3) 書肆黄氏の活動時期

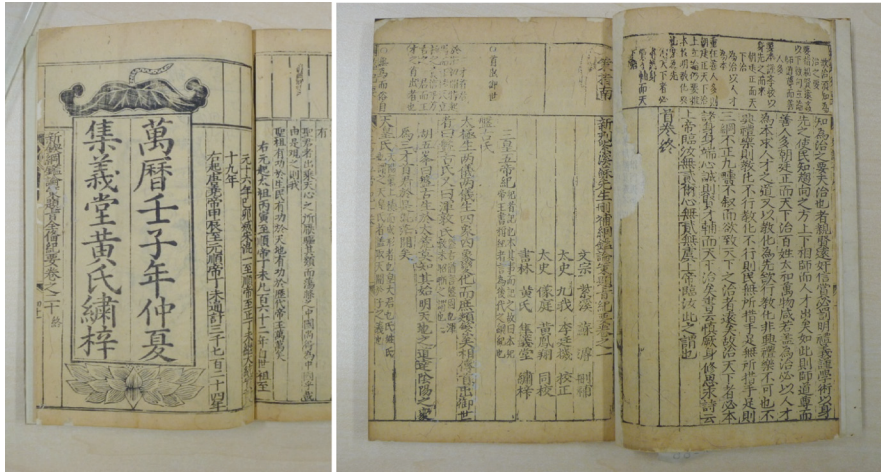
「萬曆新歲」の刊記を持つ出版物が萬曆元年の出版か否かについては、当然ながら、その版元の文宗堂黄氏を含む書肆黄氏の活動時期と密接な関係にある。

しかし、建陽黄氏の出版活動については、不明なことが多い。そのため、ここでは、萬曆後期の建陽黄氏出版活動について知り得た結果の概要を記し、小論の一助とするにとどめたい。

閩版研究者の方彦寿氏は、福建の建陽黄氏は、嘉靖十六年（1537）に『新刊春窗聯偶巧対類編』を出したと言われる（注7）。しかし、それが集義堂黄氏、もしくは黄氏集義と関係があるかは不明である。黄氏集義の活動を考える時、集義堂黄氏の書林名がまず頭に浮かぶ。その出版物は、今日いくつか残る。その1つ、『新刻紫溪蘇先生刪補綱鑑論策題旨紀要』（国立公文書館旧内閣文庫本、図版3）には連牌木記があって、「萬曆壬子年仲夏集義堂黄氏繡梓」と記すことから、萬曆壬子40年刊本とわかる。『鼎雕陳氏家伝如宜妙濟回生捷録』（同上旧内閣文庫本）も集義堂刊本で、その本文刊記は「芝城書林 梓」（上下巻ともに同じ）と書肆名は削除されるものの、封面には「集義堂・書林黄廉齋梓」と記され、巻下末の連牌木記に「萬曆庚戌秋月書林黄廉齋梓」と記すことから、萬曆庚戌38年の刊行であったことがわかる。両書から、集義堂が黄廉齋を堂主とし、萬曆後期に活動していた書林であることが判明する。

集義堂出版物は、方彦寿氏によれば、萬曆年間に『新鍍鄭翰林類校注积金壁故事』を集義堂黄直齋が、『新鍍京板全補源流引蒙登龍会海対類』を集義堂黄正慈が、そして萬曆二十六年（1598）に『新鍍国朝三元品節標題綱鑑大観纂要』を集義堂黄氏楽吾軒が出版した、という（注8）。黄氏集義堂の書肆名は同じであるが、書齋名、本名（字）、屋号と思われる記載は異なる。

仮に集義堂の堂主黄氏が1人とし、萬曆中期以降に活動した人と見るならば、集義堂の黄廉齋、黄直齋、黄正慈、黄氏楽吾軒というそれぞれの表記は、廉齋もしくは直齋が書齋名、正慈が字、



(図版 3) 『新刻紫溪蘇先生刪補綱鑑論策題旨紀要』(国立公文書館旧内閣文庫蔵) 蓮牌木記・巻 1 本文

楽吾軒は起居する室名か屋号を示すことになる。名はあとで示すように智字であることから、集義堂は版元書肆の屋号（正堂名）である。一方、黄氏集義本人は集義の名前で文宗堂を営んでいたことから別人であろう。

建陽の著名な書肆である余象斗の雙峰堂三台館の場合、兄弟で父の書齋名を名乗って版元の名を雙峰堂とし、のちに堂主となった余象斗は 2 人の兄弟にちなみ、本人の版元名を別に三台館と称したらしい。黄氏の集義堂という版元書肆名は、余象斗の雙峰堂三台館のように、文宗堂という名の書肆主黄集義の後を継承した息子、もしくは息子たちが、父に敬意を込めてその名を屋号とした可能性もある。この場合、文宗堂が先に活動し、次いで、集義堂がその後の営業を引き継いだことになる。しかし、雙峰堂と同じとするならば、集義堂主は 1 人という先の仮定は成り立たず、集義堂経営の黄氏は複数いて、黄廉齋と黄直齋は、兄弟の可能性もある。

実際、方彦寿氏の掲げた『新鍔鄭翰林類校注积金壁故事』とは別に『類校金壁故事』（旧内閣文庫本）には、和刻本ながら、依拠した明刊本の刊記類があり、封面（b 面）の前に変則的な蓮牌木記「萬曆 歳冬月/集義堂直齋刊行」（a 面）があり、本文巻首刊記には、「蕪林 直齋 黄正慈梓行」とする。このことは、集義堂の黄廉齋と黄直齋（黄正慈）が兄弟であることを意味しよう。

以上とは別に、集義堂主人を知る手掛かりの一つに、『紫燕泥金捷錦』（東北大学附属図書館蔵、図版 4）がある。正式には、「新鍔李九我註积金公分類書東鴻雁伝音紫燕泥金捷錦」と称し、王百谷註輯による尺牘集の一つで、書林黄智字が萬曆年間に刊行した。封面及び本文刊記には「書林黄智字刊（梓行）（繡梓）」とあり、巻末の蓮牌木記は「萬曆新歳之吉書/林黄氏集義堂梓」とし、これにもやはり萬曆新歳の字句が記される。封面・本文刊記は蓮牌木記と対応することから、封面と刊記類は同時期に雕印されたものと見られ、黄氏集義堂は黄智字の版元名であることがわか



(図版 4) 『紫燕泥金捷錦』(東北大学附属図書館蔵) 刊記・封面



(図版 5) 『詩經集註』(名古屋市蓬左文庫蔵) 蓮牌木記・封面

る。一方、名古屋市蓬左文庫『詩経集註』（図版 5）の蓮牌木記には「仁字」、封面には黄智宇とあり、智宇が仁字と同一人物でなければ、黄仁宇という黄氏集義堂関係者がいたことになる。

黄智宇以外、黄氏の中で字字を持つ人物には、黄禎宇がいる。『新刻校訂附音句解大字文公小学正蒙書題』（旧内閣文庫本）の蓮牌木記には「萬曆新歳春月穀旦熊冲宇梓」と記されるが、封面には「仁和堂・閩建□□□（原本破損、筆者注）・・・」と記され、本文巻頭刊記には「閩建書林禎宇黄応祥刊」とある。黄禎宇（応祥）と熊冲宇の共同出版なのか、或は出版に前後があるのか不明であるが、黄禎宇（応祥）刊本があったことは確かである。

謝水順・李珽氏『福建古代刻書』や方彦寿氏の調査では、興正堂黄秀宇という人物もいて、隆慶・萬曆初に活動した書林とする（注 9）。もしこれが事実ならば、建陽黄氏で字字排行の人々の活動期間は「隆慶・萬曆初」から「萬曆十二年～三十九年」頃に及ぶ。仮に黄秀宇が集義堂関係の人で、「宇」字を排行に持つ人の長兄とした場合、その活動時期は「萬曆元年」をはさんで行なわれた可能性もあるが、これらの人を実の兄弟と見て、字字排行から考えると、隆慶から萬曆末までを一世代とする幅はいささか広すぎる。

沈津氏の調査によれば、ハーバード大学蔵『五経集註』の『書経集註』巻六には「書林興正堂黄氏秀宇梓」の牌記があるといわれる（注 10）。

その一方で、『五経集註』を構成する『周易本義』及び『詩経集註』には葉国器の識文、『礼記集註』には「書林新賢堂張閩岳精鐫」とあり、『春秋胡氏伝』巻三十牌記に「書林新賢堂張閩岳精鐫」とあることから、沈津氏は三書林の雕版であり、三書林による印刷の可能性を示している。『五経集註』が共同出版か五経の取り合わせ本かは不明であるが、前者の場合、張閩岳刊『春秋胡氏伝』にある萬曆 33 年刊記から、三書林は萬曆中期の書肆で、黄秀宇もそのころに活動していた人となる。

興正堂黄秀宇については、不明なところが多く、正確な活動年代は把握できない。杜信孚氏『明代版刻綜録』巻七が最初の紹介らしく、『春秋胡氏伝』巻三十後牌記に「萬曆新歳興正堂秀宇堂」とあり、「明萬曆書林黄正宗興正堂秀宇堂」が出版したという。その後、謝水順・李珽氏『福建古代刻書』が『春秋胡氏伝』は隆慶 5 年の刊刻とした。方彦寿氏は『福建古代刻書』を承けて隆慶・萬曆の書林と見たらしい。杜信孚氏が『春秋胡氏伝』原本を見て、巻三十後牌記の「萬曆新歳興正堂秀宇堂」から萬曆書林黄正宗興正堂秀宇堂刊本と見なしたと思われるが、牌記の記載がいささか雑で、正確な引用とは思われず、秀宇堂や黄正宗の出典はよくわからない。一方、謝水順・李珽氏や方彦寿氏も隆慶 5 年の刊刻とした根拠を示されない。従って、現段階では杜信孚氏の指摘する『春秋胡氏伝』巻三十後牌記から、興正堂が萬曆新歳に刊行したとする記載を否定せず、念頭に置きたい（注 11）。

明後期、集義堂黄氏を含めた建陽黄姓書林の出版物には、『鼎鐫註釈便民東牘霞天錦札』（潭陽黄台輔梓行）、『鏤便蒙二十四孝日記故事』（萬曆 39 年黄正甫梓、旧内閣文庫蔵）、『絵図全補故事七宝大成』（萬曆 32 年書林黄次白重刊、東京大学東洋文化研究所蔵）（注 12）、『四書経言枝指纂』（萬曆 46 年黄近嶺重刊、加賀市立中央図書館蔵）などがあり、萬曆後半に多く出版されている。

黄台輔梓行の『霞天錦札』の編者は張瀛海、つまり張以誠であるが、萬曆48年與畊堂費守齋刊『新刻京本全像演義三国志伝』に、閩（校）者としてその名が見える。つまり、張瀛海とともにその本を出した黄台輔も萬曆後半の人であることが推定される（注13）。

建陽黄姓書林の中で集義堂黄氏に関連する書肆として、最初に提示した黄氏餘慶堂に目を転じたい。

ハーバード大学蔵『鼎刻京板太医院校正増補青囊医方捷徑』には、封面に「書林餘慶堂黄祭宇梓」、刊記には「南閩芝城潭陽蕪林黄祭宇梓」とあると指摘される（注14）。これから、黄祭宇は書肆餘慶堂を運営していたことが分かる。旧内閣文庫本『鼎刻京板太医院校正分類青囊藥性賦』には、封面に「杭城楊承甫發行」、卷下本文刊記に「武林楊承甫刊行」とある一方、本文刊記巻上には「閩蕪林 黄心岫刊行」、巻中には「閩蕪林 黄祭宇刊行」とする。楊承甫の重刊か黄心岫との共同出版かは不明であるが、黄心岫は黄祭宇とも称した版元書肆であったことが窺える。謝水順・李斑氏『福建古代刻書』でも、黄焯（祭）宇がその版元になっているから、旧内閣文庫本と同じであろう。大谷大学神田文庫の『新鍔搜羅萬卷合併利用便覧全書』は、萬曆41年ごろ、書林餘慶堂黄耀宇の刊行である（注15）。つまり、黄耀宇は、黄祭宇と一緒に書林餘慶堂を共同運営していたことにもなる。

黄耀宇は、別に『四譜真訣』（旧内閣文庫本）も出した。封面には、「重鍔徽郡原板」と黄耀宇の名があるが、卷四末の刊記には萬曆三十七年（熊氏）誠徳堂の刊記があり、安徽省の版をもとにした黄氏、熊氏の共同出版、或は、黄氏、もしくは熊氏の先行本の版木を用いて両者いずれかが重版したのかもしれない。

加賀市立中央図書館蔵『易象管窺』の封面には、「黄氏餘慶堂梓」とあって餘慶堂刊本と分かるが、この黄氏に該当する人物は不明。この他、『史鱗』（萬曆庚戌38年謝肇淛識）を景晋齋の書齋名で崇禎三年に刊行した黄師表・師正がいるが、二人は兄弟と思われる。（注16）。

以上の例から、明代後期の建陽書林黄氏には、黄智宇、黄耀宇、黄禎宇（応祥）、黄次白、黄祭宇（宇、心岫）、黄近嶺、黄正甫の他、黄秀宇、黄師表・師正景晋齋（崇禎三年）、黄台輔、黄正選、黄正達がいたことが分かり、実際に、それらの版元の出版物が残る。「宇」「正」「師」字を共有する人々は、排行の考えからすれば、兄弟などの血縁関係を持つと思われるため、正慈、正甫、正選、正達という名乗りの一群の人々、或は、耀宇・禎宇・祭宇・秀宇という名乗りの一群の人々は排行が同じ（族）兄弟であろう。ただし、余象斗のように同一人物の複数の別名が、書齋名や字名などと混在して表記されていることもあり得る。

文宗堂集義黄氏を名の版元は、寡聞では浅野本のみを知るが、『明代版刻綜録』巻一では、『精選古今詩詞筵席争奇』三巻を刊行した「明萬曆書林黄正甫」の名を挙げる（注17）。もしも、文宗堂の堂主が黄正甫であるならば、酒井氏も挙げられた『鍔便蒙二十四孝日記故事』（『興賢日記故事』）の蓮牌木記には「萬曆辛亥孟夏月書林黄正甫繡梓」とあるので、この日記故事は萬曆辛亥39年文宗堂刊本と見なせる。また、『新刻攷訂按鑑通俗演義全像三国志伝』は天啓3年序のある黄正甫刊本であることから、文宗堂は集義堂と並存した萬曆後半から天啓にかけての書肆とい

うことになる。しかし、『精選古今詩詞筵席争奇』三巻を刊行した「明萬曆書林黃正甫」が文宗堂集義黃氏であるという明証が提示されていないので、文宗堂と集義堂とは黃氏親子の書肆という仮定も、可能性は低いとしてもなお捨てきれない。

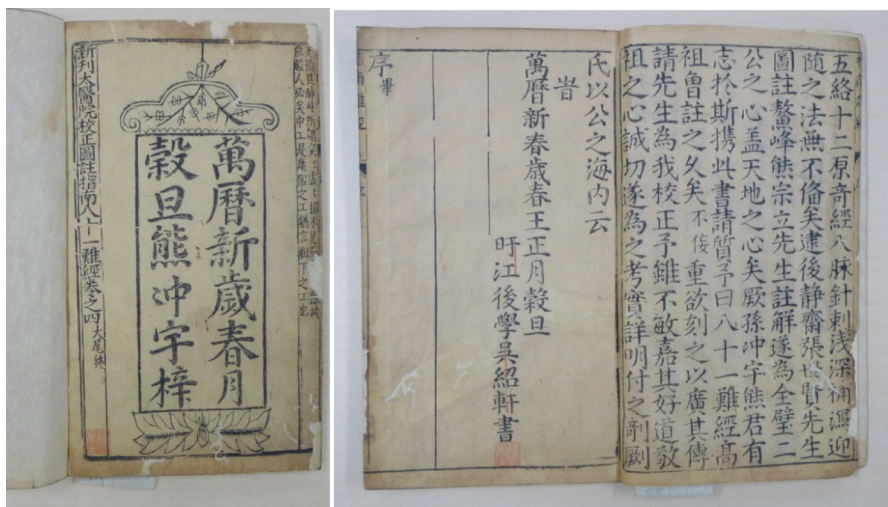
いずれにせよ、『新鐫京台輯訂全書使用一覽大宗』が文宗堂黃集義によって刊行されたことは確かで、萬曆新歳という刊記の文字は、黃集義の活動が萬曆元年以降になっても継続していたことを意味する。従って、文宗堂と集義堂とは黃氏親子の書肆という仮定の場合でも、集義黃氏の子供が営む集義堂の活動時期は萬曆前期以降となろう。それゆえ、集義堂刊『紫燕泥金捷錦』の萬曆新歳を萬曆元年（1573）とする可能性は、やはり極めて少ない。

想像であるが、建陽の書林黃氏ファミリーは、現代的に言えば持ち株会社を持ちつつも、負債などに備えて親子兄弟で個々の版元書肆を別名で持っていたのではないか。この観点からすれば、黃廉斎と黃直斎は、同一人物ではないこともあり得よう。また一方で、文宗堂黃集義と集義堂黃智宇とは、堂名の付け方から、黃氏親子の可能性も捨てきれない。建陽の有力な黃氏などの書肆は、出版、販売などに関して広域に展開する企業体を組織していたのかもしれない（注 18）。

書林黃氏については、小論の主要な検討課題ではなく、また、建陽書林黃氏の宗譜（『敕建溪書院黃氏宗譜』、AKA『江夏黃氏宗譜』）といった系図の確認をしていないこともあり、版元書肆の建陽書林黃氏については継続検討課題とし、ここでは書林黃氏が出版に際して萬曆新歳を使用した例示にとどめて、再び萬曆新歳の出版物に関する論題に立ち戻りたい。

書肆黃氏について長々と述べたため、論点が明確ではなくなったが、ここで再び視点を刊記の問題に当てよう。実は先掲の集義堂黃智宇の『紫燕泥金捷錦』は、萬曆新歳の論題にも重要な情報を提供している。それは、註釈をつけた李九我、すなわち李廷機（1541～1616）の存在である。李廷機は、活躍時期と名声から、その名称を付けた出版物は萬曆後半に多い。李廷機は、隆慶 4 年（1570）順天府の郷試解元、萬曆 11 年（1583）に会元・榜眼で及第して官僚生活を開始した。李廷機に係わる出版物では、早くは国立公文書館旧内閣文庫の『文海波瀾』がある。本書は挙業用の類書で、「萬曆甲戌（二）仲春吉旦」の黃鳳翔序があり、李廷機の編集になる。版元は、晋江書舎（泉南書舎）楊応春刊行である。（注 19）「萬曆甲戌（二）年」の出版とすると、李廷機は解元になって三年後に、本書を編集したことになる。李廷機は、解元の時に既に科挙参考書に編者としてその名が使われたことになるが、しかし、多くの科挙参考書などに李廷機の名が使われるのは、榜眼となった萬曆 11 年以降で、名声が広まって官僚読書人の門弟が集まり、社会に影響力が増大した時期に、出身地の福建の書肆がそれにあやかっただと思われる。『文海波瀾』と同じように、李廷機は黃鳳翔と太史の官名で、『新刻紫溪蘇先生刪補綱鑑論策題旨紀要』（旧内閣文庫本）に校正・同校で参与し、黃氏集義堂が萬曆壬子 40 年に刊行している。

『新刻紫溪蘇先生刪補綱鑑論策題旨紀要』の校正が、名義貸しでも、それが萬曆壬子 40 年以前であったとしても、黃氏集義堂が萬曆 40 年に刊行した時からは極端に遡らないであろうから、集義堂黃智宇の刊行物である『紫燕泥金捷錦』の刊記、「萬曆新歳」は、やはり萬曆 11 年以降の歳時を意図した字句として想定したほうがよい。



(図版 6) 『新刊太醫院校正圖註指南八十一難經』(国立公文書館旧内閣文庫蔵)
蓮牌木記・序記

(4) 建陽版に見られる「萬曆新歲」の刊記

「萬曆新歲」の刊記文字を伴う例は、書肆黄氏ばかりではない。黄氏以外の書肆、例えば、余秀峰(良史)の刊行した『詩經尊朱約言』(加賀市立中央図書館蔵)では、顧起元による叙が萬曆28年となっている。蓮牌木記には、「萬曆新歲秋月穀旦余秀峰梓」と萬曆新歲を使っている。本文書題の次には、顧起元考意と並んで、「書林秀峰余良史梓行」とあるから、余秀峰が萬曆28年直後に刊行したと見てもよい。余秀峰は怡慶堂と称したが、その多くの出版物は萬曆20~30年代に多い(注20)。

熊冲宇も刊記に「新歲」「新春」を用いるのを好んだと見え、王縉山(衡)編、張以誠(張瀛海)校、熊成治(冲宇)種徳堂刊『新鐫王縉山先生摘纂懸壺故事』の刊記は「萬曆新歲春月穀旦熊冲宇梓」とある(注21)。『新刊太醫院校正圖註指南八十一難經』(旧内閣文庫本、図版6)の本文刊記に「書林熊冲宇梓行」、蓮牌木記には「萬曆新歲春月穀旦熊冲宇梓」とあるほか、巻頭の「新刊指南難經序」にも、校正者紹軒吳文炳が「萬曆新春歲春王正月穀旦吁江後學吳紹軒書」と、萬曆新歲や新春と記入する。同じ医書の『新鐫太醫院校正刪補医方捷徑指南全書』(旧内閣文庫本)も吳文炳刪補・書林冲宇熊成治本で、蓮牌木記に「萬曆新歲冬月穀旦熊冲宇梓」とする。また、先に示した『新刻校訂附音句解大字文公小学正蒙書題』(旧内閣文庫本)の蓮牌木記には「萬曆新歲春月穀旦熊冲宇梓」とある。熊冲宇が「萬曆新歲春月穀旦」表記で出版した一例でもある。『新刻台監曆法増補応福通書』(旧内閣文庫本)は占曆の書籍であるが、萬曆戊午歲(46年)熊振驥の「刻全備通書序」の直後に、小字双行で「書林種徳堂冲宇」の広告文が続く。本文巻首刊記には「(建邑)種徳堂熊冲宇梓行」、卷三十七末には、蓮牌木記「萬曆新春歲藝林熊冲宇繡梓」とある。広告文とは別に、序文部分が後から付けられたことがない限り、種徳堂熊冲宇の活動は萬曆

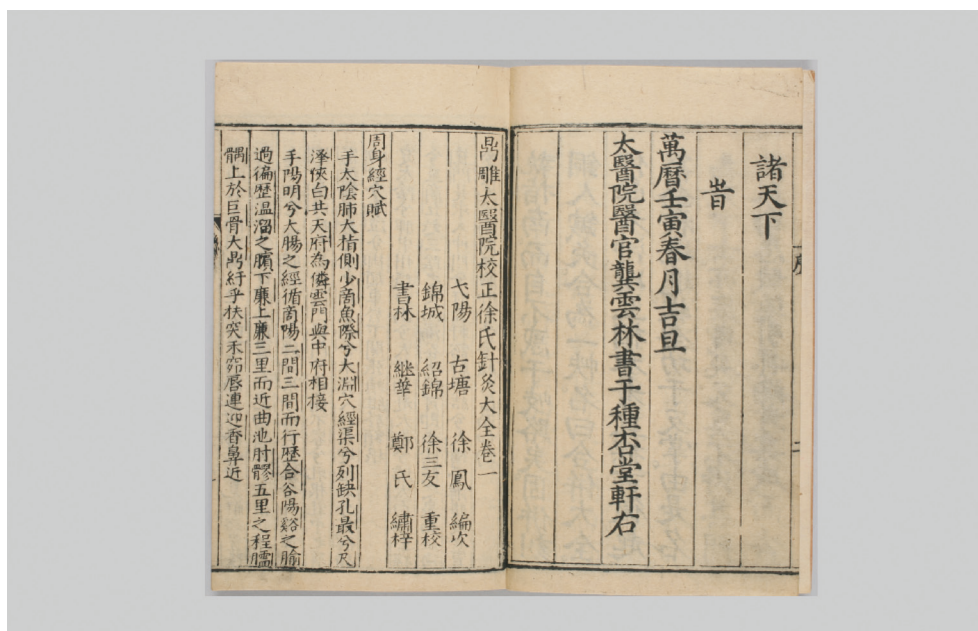
戊午歳（46 年）でも行われ、萬曆新春歳も萬曆末期を指していたことになる。

熊冲宇が刊行した本は多く残り、以上の書籍とは別に、例えば、経書では『書経便蒙講意』（旧内閣文庫蔵）で萬曆 39 年刊、史書では萬曆二十四年、医書では萬曆三十三年、通俗日用類書が萬曆三十五年などの出版物がある（注 22）。これからすると、種徳堂熊冲宇が中心的に出版活動した時期は、萬曆二十年代から四十年代頃までである。坂出祥伸氏は種徳堂の刊行物にある「萬曆新春歳」の刊記に着目されて、京都大学附属図書館谷村文庫の『新刻群書摘要四民使用一事不求人』を紹介された時、その蓮牌木記に、「萬曆新春歳仲春月建書林種徳堂□□□□」とあることから、種徳堂熊冲宇が萬曆元年に刊行した明代日用類書の中で最も早い刊本とした。本書に熊冲宇の名前があるかは坂出氏の紹介文では分からないが、この論考執筆時には種徳堂の書林主を熊冲宇とし、萬曆新春歳を萬曆元年と認定されたわけである。その一方で、酒井忠夫氏が取り上げた東京大学東洋文化研究所仁井田文庫蔵『新刊翰苑広記補訂四民捷用学海群玉』二十三卷四冊を紹介されつつ、熊冲宇種徳堂の日用類書に萬曆三十五年序本が別にあっても、熊冲宇には萬曆元年刊の『周易』などがあるから両者は矛盾しないとされる（注 23）。その後、大谷大学図書館所蔵林山文庫『新刊翰苑広記補訂四民捷用学海群玉』の紹介で種徳堂熊冲宇の活動時期を論じる中で、学海群玉の萬曆元年刊を取り消し、萬曆年間刊と訂正された。この判断は正しい。しかし、憶測で申し上げるのは失礼であるものの、萬曆元年刊の『周易』などがあるから両者は矛盾しないとされる点までは、改められてはいないと思われる（注 24）。前にも述べたが、種徳堂熊冲宇の活動時期を考えれば、これがおかしいことは一目瞭然である。

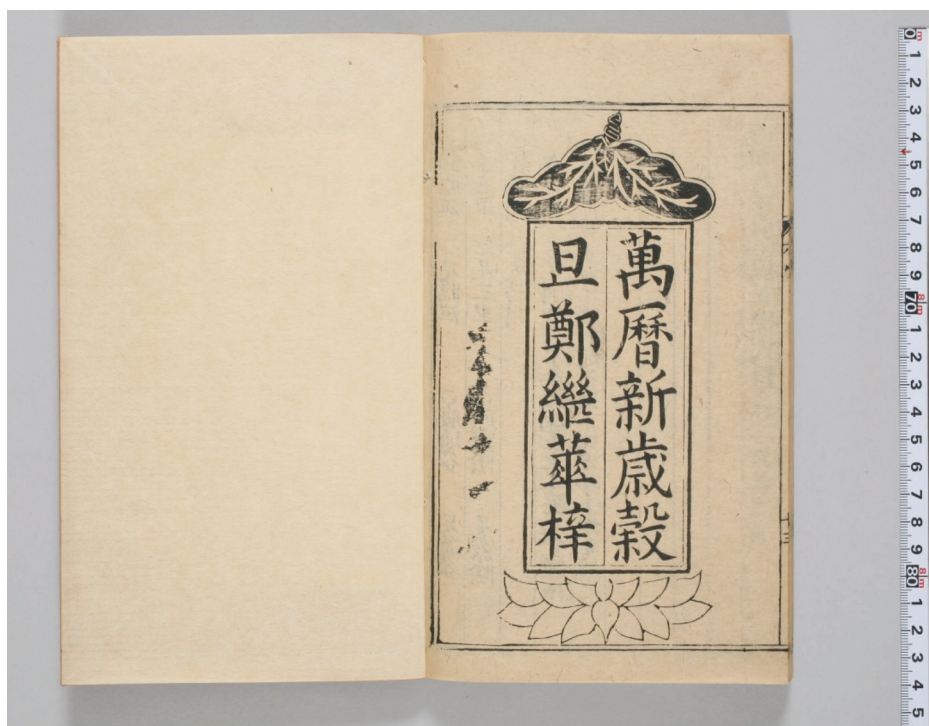
黄氏や熊氏のほか、鄭氏にも類例がある。鄭氏刊行の『鼎雕太医院校正徐氏針灸大全』（旧内閣文庫本、図版 7）には、蓮牌木記にやはり「萬曆新歳穀旦鄭繼華梓」（図版 9）とあるが、その序文の年月は「萬曆壬寅春月吉旦」とする（図版 8）。序文と刊記がいずれも「萬曆」年号を共有し、封面と本文刊記、蓮牌木記に鄭氏もしくは宗文堂の名前があるから、本書は鄭繼華の刊行物であり、序文と蓮牌木記は対応していたと見るべきであろう。ここで、小論の結論が出たと見られるものの、他方で、新旧いくつかの序文が出版の度に加えられていったことも明刊本にはあるから、この序文が再刊時に添えられ、原刊本の刊記のまま印刷されたとすれば、萬曆元年の刊行も可能性としてはあり得るかもしれない。徐氏針灸大全の場合、仮に刊記の萬曆新歳が元年であったとすれば、「小引」の辛亥はそれに先立つ嘉靖辛亥 30 年（1551）となる。つまり、萬曆元年（1573）に先立つこと 22 年前に序文が出来て、その後時間がたっての出版になったことになる。不自然なことではあるが、原稿のままでも置かれていたとも、或は、別の書肆から嘉靖時代に刊行された版本を重刻した時が萬曆元年であったとも考えられる。前者の場合では、序文の歳時を 22 年前のものそのまま、つまり萬曆の代わりに嘉靖に改めるか、元号を省いた方がよかったであろう。後者の場合では、いささか強引な仮定のため、かえって先行本の存在、現行の版本が重印本であることを確認するなどの手続きを踏んだ証拠立ても必要である。この萬曆新歳の記載も元年に固執することなく、むしろ、建陽の鄭繼華の出版活動から見れば一目瞭然で、出版時に添えた序文の年代、萬曆壬寅 30 年頃と見れば、余計な仮定を立てることもなかろう。



(図版 7) 鄭繼華刊『徐氏針灸大全』(国立公文書館旧内閣文庫蔵) 序文 封面



(図版 8) 鄭繼華刊『徐氏針灸大全』(同上) 卷1・序文 (萬曆壬寅春月)

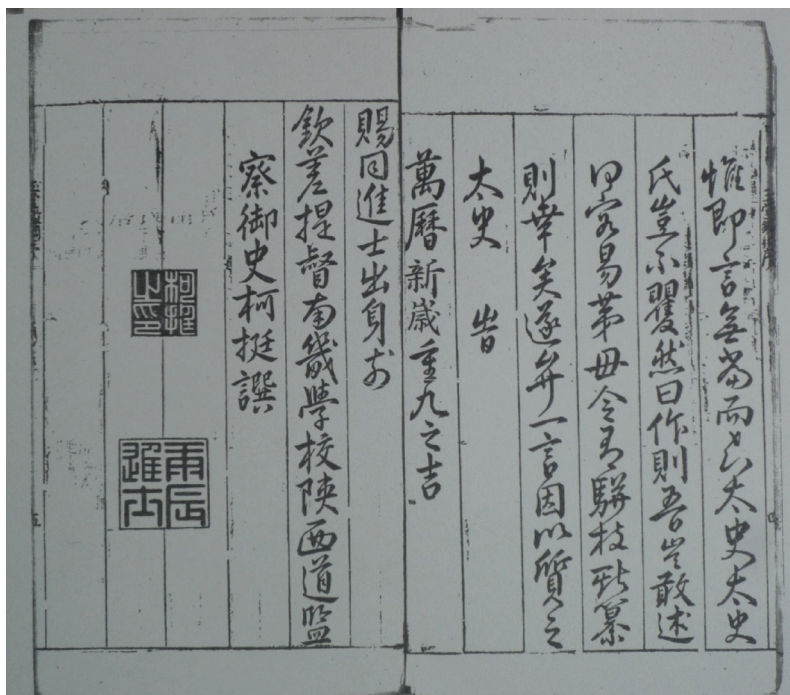


(図版 9) 鄭繼華刊『徐氏針灸大全』(同前) 蓮牌木記

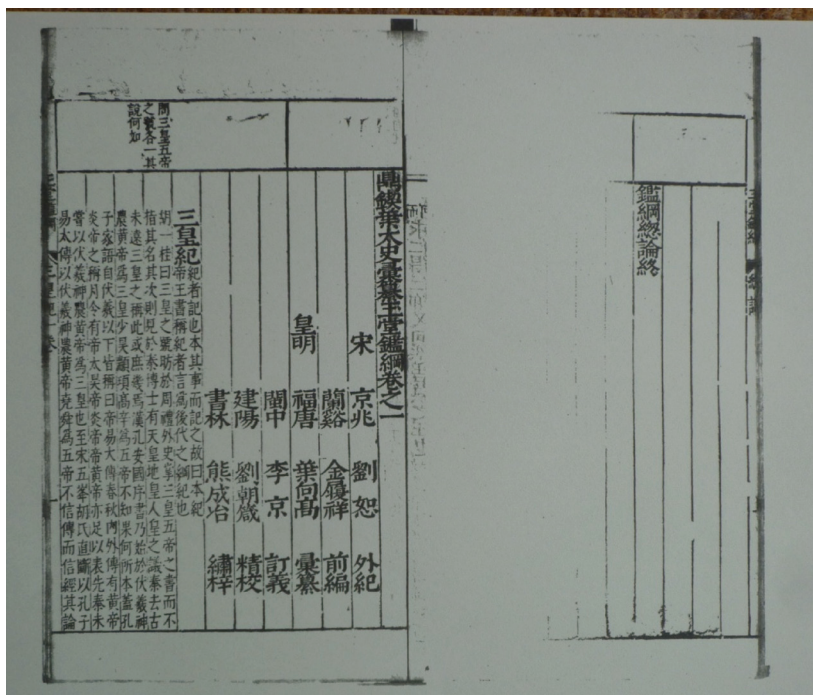
つまり「新歳」とは、元年も含みつつ、「萬暦年号にくり返し新たな歳時が重なる」とか「萬暦年の心新しい良き年」などという意味で用いられたのであろう。小川陽一氏が『鼎鍔崇文閣滙纂士民萬用正宗不求人全編』の引文(萬暦己酉 37 年)が刊記(萬暦丁未 35 年)より二年後になっている点を指摘されるような例(注 25)も現存本にはあるが、初刻本の場合、出版史上、「なんでもありき」の建陽出版でも、序文の年月より刊記の年月が極端に古いことはあり得ない。

一方、「萬暦新歳」の文字は刊記のみではなく、序文にも見える。中砂明德氏が紹介される『鼎鍔葉太史彙纂玉堂鑑綱』(図版 11)には、熊体忠本と種徳堂熊成治本などがあり、熊体忠本の序にある「壬寅」を熊成治本で「新歳」と改刻された例を示される(図版 10)。種徳堂熊冲宇の名乗りではないが、種徳堂熊成治(冲宇)によって用いられた新歳が、萬暦壬寅三十年以降の歳年として使われている(注 26)。つまり、「萬暦新歳」は萬暦元年ではなく、年代的に萬暦後期の歳時に当てられることもあったのである。

熊氏や黄氏に限らず、建陽の書肆鄭氏も「萬暦新歳」を使い、序文が萬暦三十年という例もある徐氏針灸大全や熊成治本『鼎鍔葉太史彙纂玉堂鑑綱』からしても、無理な想定をしてまで萬暦新歳を元年と考える必要はない。最初の導入に紹介した全書一覽正宗も萬暦三十九年序刊本とすべきで、萬暦三十九年までに出版の準備が整い、おそらくその直後に出版されたのであろう。



(図版 10) 『鼎鏗葉太史彙纂玉堂鑑綱』種徳堂熊成治本（名古屋市蓬左文庫）序



(図版 11) 『鼎鏗葉太史彙纂玉堂鑑綱』種徳堂熊成治本(同上)卷1本文

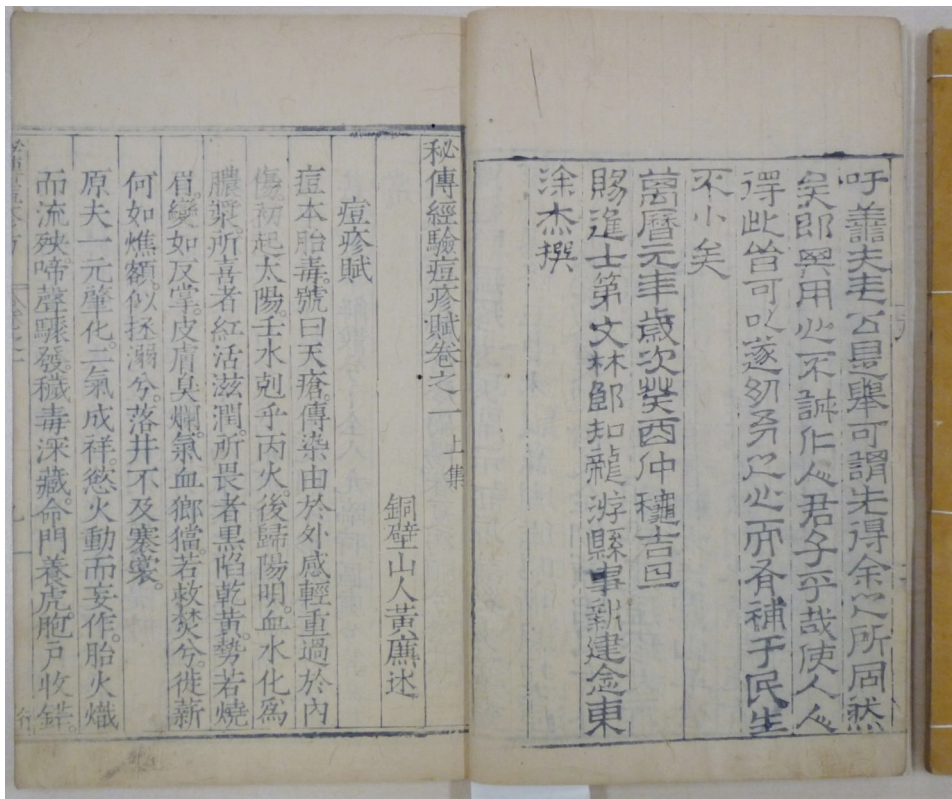


(図版 12) 和刻本『日記故事大全』(国立公文書館旧内閣文庫蔵) 蓮牌木記

以上の用例のほか、閩建書林・葉志元刊『新刻京板青陽時調詞林一枝』(旧内閣文庫、刊記に「萬曆新歲孟冬月書林葉志元綉梓」)、書林蔡正河刊『鼎雕崑池新調八能奏錦』(旧内閣文庫、刊記に「皇明萬曆新歲愛日堂蔡正河梓行」)、金拱塘刊『翰林註選鳴鳳同聲玉唾珠璣』9 卷(大阪府立中之島図書館蔵、刊記に「萬曆新歲書林金氏拱塘重梓」)、黃氏餘慶堂刊『鼎雕校正評釋官板古文標英大全』4 卷(東京大学 東洋文化研究所蔵、刊記に「皇明萬曆新歲書林黃耀字梓」)、余完初刊『新鐫官板大字周易本義』4 卷(筑波大学 附属図書館蔵、巻尾に「萬曆新歲穀旦書林余完初梓」)、劉龍田刊『新鐫類解官様日記故事大全』7 卷(図版 12)(旧内閣文庫蔵、中尾市郎兵衛寛文 9 年版、原版の刊記「皇明萬曆新歲 劉龍田精梓行」、見返しに「忠恕堂詹敬菊梓」文字あり)などの用例がある。

(5) 「萬曆新春」の刊記

一方で、萬曆元年刊本も当然存在し得る。旧内閣文庫には、萬曆元年刊と推測される明刊本が少なくとも三種ある。その一つ『靈棋経』は後序に刊記があり、「萬曆元年春月吉旦」と明記し、萬曆元年の重刊本であることがわかる。『鄒東廓先生詩集』には刊記はないものの、「萬曆元年春正月吉日」日付の陳元珂による「鄒東廓先生詩集序」が冒頭にあるので、萬曆元年序刊本になる。子の鄒善の編集による家刻本と思われ、嘉靖時代の刊本に多い白綿紙が使われる。『樗菴先生集』の巻頭に置かれる「樗菴集序」は、萬曆癸酉春三月望日の陸師道の署名があり、刊記はないが、



(図版 13) 『秘伝經驗痘疹方』(国立公文書館旧内閣文庫蔵) 卷 1・序文

萬曆癸酉つまり元年序刊本になる。本書も白綿紙の家刻本と推測される。『秘伝經驗痘疹方』(図版 13) の序文も萬曆元年歳次と明記し、後跋にも萬曆改元冬と記す。本書も、薄い白綿紙らしい。嘉靖時代の刊本に多い白綿紙は萬曆以降の出版にも使われる。白綿紙の使用は刊行時期の傍証にはならないが、版式や字体とともに大雑把な刊行時代の把握には多少役立つこともある。

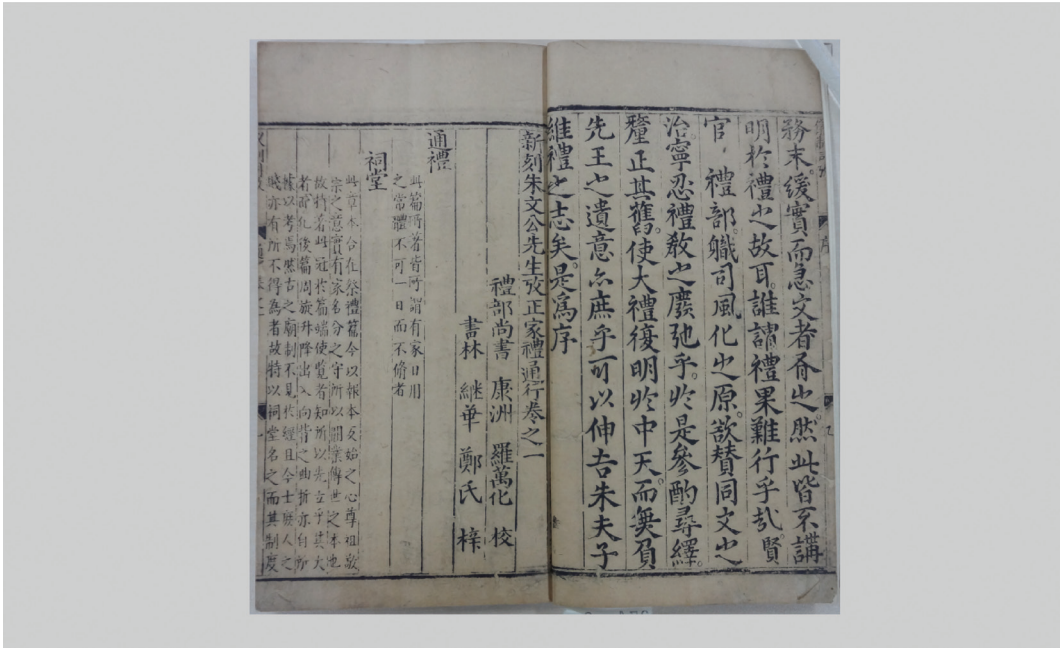
他方、内閣文庫漢籍目録の『家礼通行』(図版 14) は、建陽の書林、先掲の針灸大全を刊行した鄭繼華が刊行したもので、漢籍目録作成時、「萬曆新春」を萬曆元年と考え、萬曆元年刊とした。卷末の刊記に「萬曆新春之吉鄭/氏宗文堂繼華梓」とあることによる。『靈棋経』の刊記と比較すると、

萬曆元年春月吉旦 (靈棋経)

萬曆 新春 吉 (家礼通行)

という対比構図になる。つまり『家礼通行』では年は示さず、月を新春とし、旦日を略したような表記である。

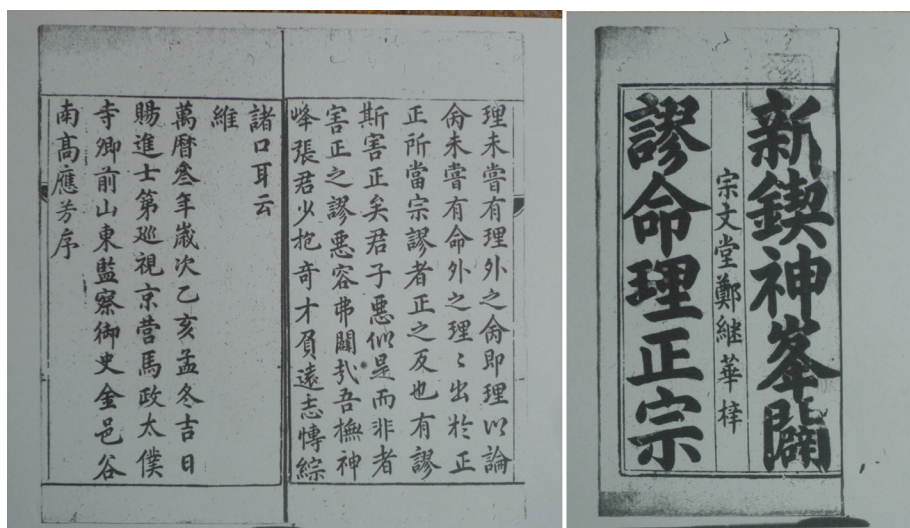
『家礼通行』は鄭繼華単独の出版物ではなかったらしく、卷八の卷首刊記では鄭繼華とは記さず、「書林閩泉 陳景滔梓」とある(図版 15)。一つの見方として、『家礼通行』は陳景滔による先行



(図版 14) 鄭繼華刊『新刻朱文公先生攷正家禮通行』(国立公文書館旧内閣文庫蔵) 卷一 (禮部尚書羅萬化校)・序



(図版 15) 鄭繼華刊『新刻朱文公先生攷正家禮通行』(同上) 「萬曆新春」刊記 卷八 (書林閩泉陳景滔刊)

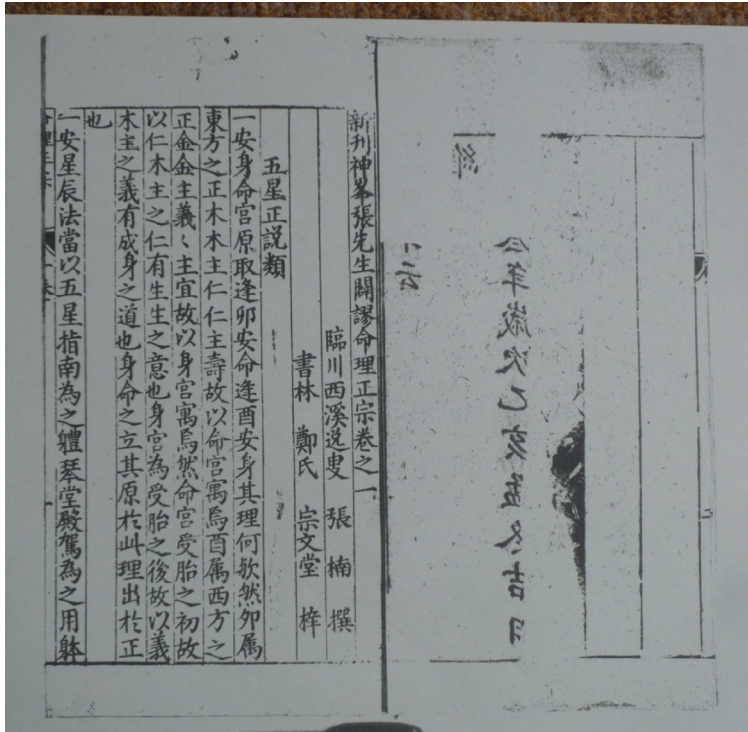


(図版 16) 『命理正宗』(名古屋市蓬左文庫蔵) 萬曆三年高應芳序・封面

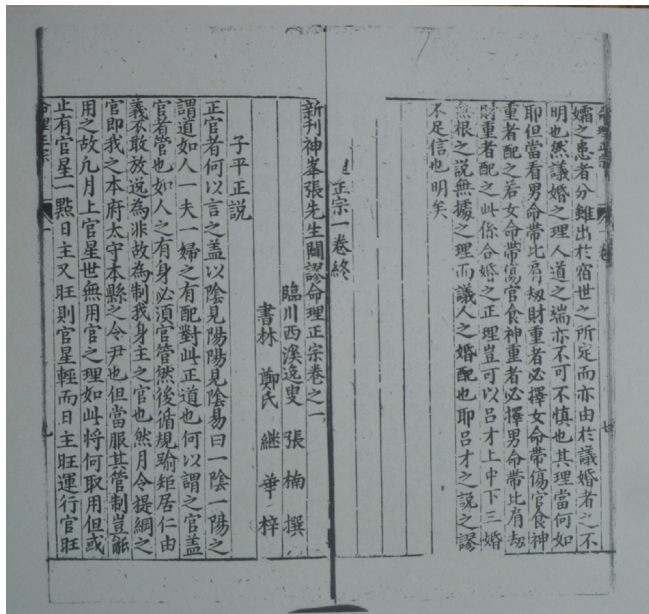
本を鄭繼華が重刊、もしくは重刻した可能性がある。泉州の陳景潯が『家礼通行』を初刻し、後に宗文堂の鄭繼華が版木を襲用し、重印する際、各巻頭の書林名を改めたものの、巻八はその版木の由来を示すために残し、改刻した際に、刊記も初印時の蓮牌木記にあった萬曆年記を削って新春としたという見方を立てることができる。その一方で、本書は鄭氏と陳氏との合弁出版で、出版が何時でも可能なように萬曆新春と称したとも考えられる。

しかし、いずれの場合でも、鄭繼華が蓮牌木記に示す「萬曆新春」が萬曆元年ではない証拠は、『家礼通行』の本文書題「新刻朱文公先生攷正家礼通行卷之一」の次にある「礼部尚書 康州羅萬化校 書林 繼華 鄭氏梓」の校者名に窺える。

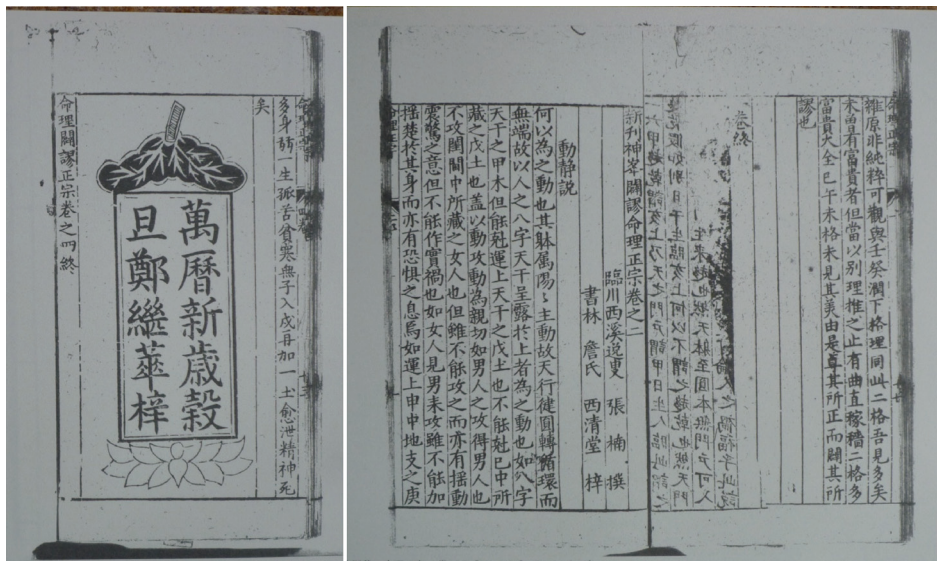
羅萬化は隆慶二年(1568)に状元に及第したものの、張居正を避けたために冷遇され、萬曆十年張居正没後、官界がようやく拓け、萬曆18年(1590)に南京吏部右侍郎となり、萬曆20年(1592)に礼部尚書兼翰林學士に到った。つまり、羅萬化が礼部尚書になったのは萬曆20年であるため、校者名の官職表記からすれば、それ以降の出版となる。仮に、陳氏原刻本が萬曆元年もしくはそれ以前にあり、校者名に「礼部尚書」の文字はなく、それを鄭繼華が再刊した時、礼部尚書を羅萬化に冠する一方、刊記は陳氏原刻本にあった蓮牌木記を用いて、再刊時に一部改めたとした場合、陳氏原刻本に存在していた蓮牌木記に「萬曆新春」の文字があり、それを鄭繼華が「萬曆新春」4字は利用しつつも、他は改めたとの見立てもあり得る。しかし、少なくとも鄭繼華が出版時、校者名に「礼部尚書羅萬化校」としたことは、「萬曆新春」という刊記文字が陳氏原刻本にあって萬曆元年の意味であったとしても、鄭繼華が版刻した時において、それを萬曆元年として使用したのではなかったことを物語る。彼の頭には、蓮牌木記にある萬曆新春を萬曆元年とする考えは毛頭なかったと言える。鄭繼華は、『命理正宗』(図版16、名古屋市蓬左文庫蔵、萬曆三年高應芳序 鄭繼華宗文堂詹氏西清堂刊)も出版している。



(図版 17) 『命理正宗』(名古屋市蓬左文庫蔵) 卷1 本文



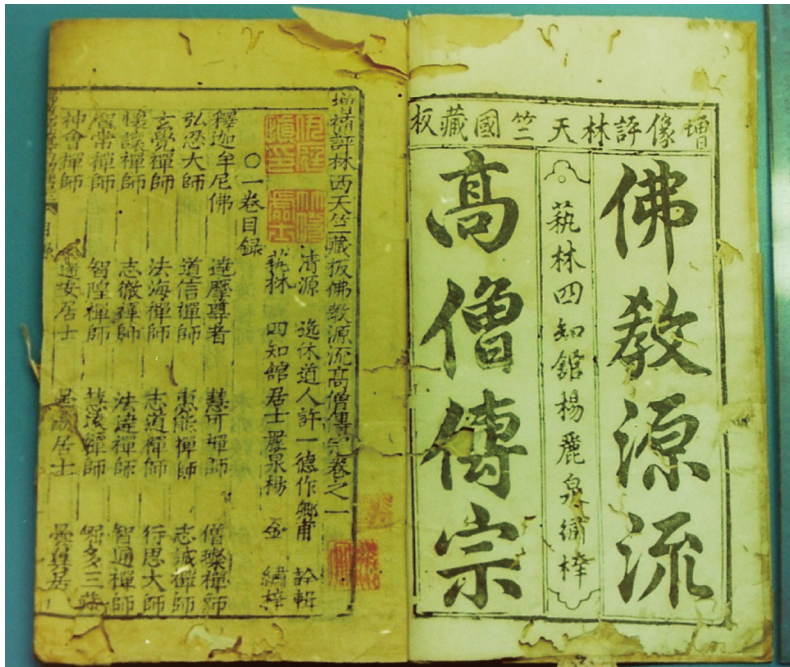
(図版 18) 『命理正宗』(同上) 又卷1 本文



(図版 19) 『命理正宗』(名古屋市蓬左文庫蔵) 蓮牌木記・巻 2 本文

目録や漢籍データベースでは、「鄭繼華宗文堂詹氏西清堂刊」(図版 19) とするが、他の出版物から考えた時、詹氏西清堂が開版し、鄭繼華宗文堂が重版したと思われる(図版 17・18)。詹氏西清堂は嘉靖時代以前にさかのぼることであるが、主要な版本は詹諒・詹秀園の萬曆前期・中期に出された(注 27)。一方、鄭繼華の出版物には、萬曆中期丙午 34 年の『刻京臺增補淵海子平大全』(東京大学東洋文化研究所、巻 6 卷末に「萬曆丙午歲春月宗文堂鄭繼華梓」とある)が残る。『刻京台增補淵海子平大全』の書誌は結論への証明にもなるので、少し言を割きたい。

『刻京台增補淵海子平大全』は、陰陽占卜関係の術数書であるが、確かに巻六卷末に刊記があり、「萬曆丙午歲春月/宗文堂鄭繼華梓」とする。これより、本書が萬曆三十四年に刊行されたことがわかる。ところが、不思議なことにその前の巻五卷末にも蓮牌木記があり「萬曆新春之吉鄭/氏宗文堂鄭繼華梓」とある。いずれも宗文堂鄭繼華であるから、萬曆新春は萬曆元年ではなく、萬曆丙午歲春月に対応する記載で、萬曆丙午歲新春の省略形とみなすべきであろう。本来ならば、鄭繼華は巻五卷末の蓮牌木記の形で刊記を入れたかったが、紙面の関係で本文 2 行分の空きに方形刊記を収め、いつもの半葉分の蓮牌木記はその前の巻五卷末に入れたのであろう。東京大学東洋文化研究所の『刻京台增補淵海子平大全』は、巻首から巻二までを欠くが、別に旧北平図書館蔵本(東洋文庫写真版)は完本である。ところが、旧北平図書館蔵本は宗文堂鄭繼華刊本ではなく、喬山堂劉大易(龍田)刊本で、本文刊記を「閩書林 喬山堂劉大易 繡梓」とし、巻六卷末に「萬曆庚子歲春月/喬山堂劉龍田梓」という本文 2 行分の方形刊記を入れる。これより、喬山堂劉大易(龍田)刊本は、萬曆庚子の年、つまり萬曆二十八年(1600)刊本ということになる。宗文堂鄭繼華刊本に先立つこと 6 年前で、巻六末の刊記から考えると宗文堂鄭繼華が喬山堂劉龍田刊本の版木を利用したようにも見える。鄭繼華が出版時、喬山堂劉龍田刊本の体裁を借りて重



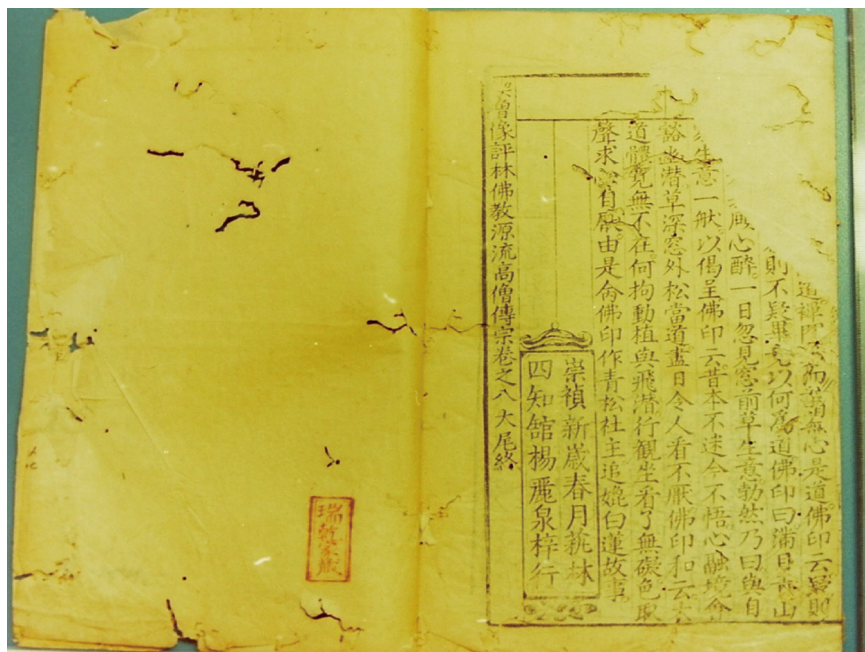
(図版 20) 『鍔増像評林仏教源流高僧伝宗』(個人蔵) 封面

刻した場合も含め、刊記部分は喬山堂劉大易（龍田）刊本の方形刊記にある萬曆庚子歳を萬曆丙午歳に改めたのではないかと推測される。同時に、自社ブランドを強調するために巻五末にわざわざ蓮牌木記を加え、版權の授受を示したのかもしれない。鄭氏と劉氏はいずれも閩建陽の書林であるから、著者徐士平や増補者の欽天監李欽を含みつつ、出版契約や版權移讓契約が結ばれていたであろう。この関係は、『命理正宗』は詹氏西清堂が開版し、鄭繼華宗文堂が重版したという推測にも当てはまるかもしれない。『刻京台増補淵海子平大全』からも、刊記の「萬曆新歳」と同じく「萬曆新春」を萬曆元年とする必要性はないであろう。

熊成治（冲字）種徳堂も、やはり「萬曆新春」の刊記を付けている場合もある。江戸時代の萬治2年（1659）刊及び正徳5年（1715）刊『文章軌範』は明代萬曆刊本の覆刻本であるが、「萬曆新春孟秋月穀旦熊冲字發行」とする原本の蓮牌木記を保存している（注28）。その蓮牌木記では、歳（季節）、月、日という日付順になっている。

「萬曆新歳」と「萬曆新春」とは、厳密に言えば、歳と季節の差があるように見えるが、意味するところは同じである。「萬曆新春歳」（『新刻群書摘要四民使用一事不求人』刊記）も同様な表現である。

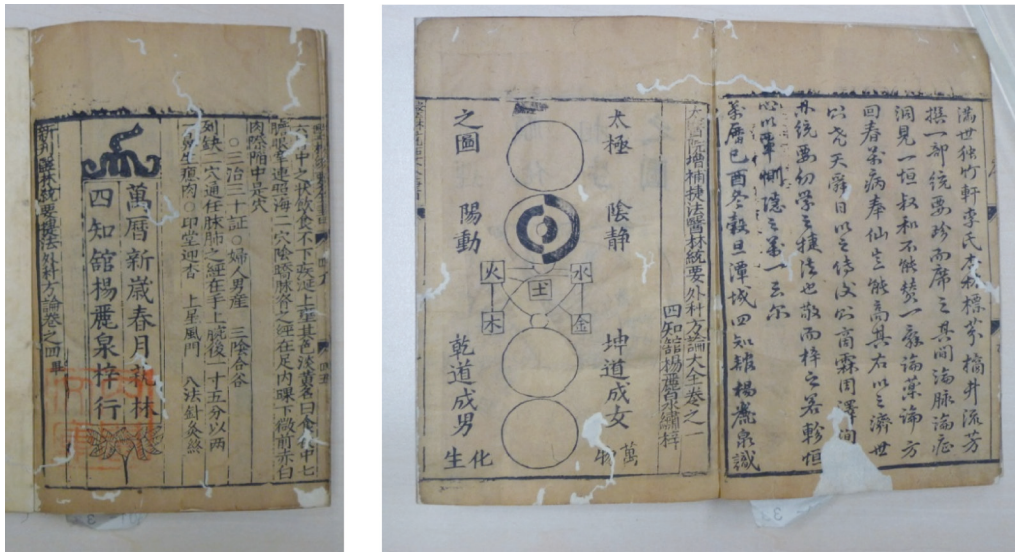
「萬曆新歳」ではないが、「崇禎新歳」という刊記をもつ版本もある。『鍔増像評林仏教源流高僧伝宗』である（図版20）。封面と蓮牌木記を持ち、木記には「崇禎新歳春月菽（藝）林/四知館楊麗泉梓行」とあり（図版21）、四知館楊麗泉の刊行物とわかる（注29）。



(図版 21) 『鍔増像評林仏教源流高僧伝宗』(富山大学附属図書館蔵) 蓮牌木記

ところが、「崇禎」二字そして「春月」二字は後の埋木に見える。本書は、崇禎元年を含む、崇禎年間に刊行された版本ではあるが、版本自体は天啓、もしくは萬曆年間に雕版されたと思われる。版式は萬曆年間に通行した明刊本の体裁を保有し、挿入図版も萬曆刊本の典型的なものといえる。楊麗泉は、四知館楊麗泉の名で、『太医院増補捷法医林統要外科方論大全』（図版 22、国立公文書館旧内閣文庫蔵）を出し、自ら、「鍔医林統要序」に「萬曆己酉冬穀旦潭城四知館楊麗泉識」と記し、蓮牌木記に「萬曆新歲春月藝林四知館楊麗泉梓行」と記すことから、本書の萬曆新歲は序の萬曆己酉 37 年あたりに落ち着こう。四知書堂楊氏の名で萬曆 39 年に科挙用をうたう『新刊京本策論品題武經通鑑』も出されている。本書の本文刊記には「書林鄭氏宗文堂仁軒刊」（巻一）、「書林詹氏新梓刊行」（巻四）などもあり、合弁出版なのか、四知書堂楊氏の再刊なのかは断言できないが、蓮牌木記に「萬曆辛亥歲孟秋旦菽（藝）林楊氏四知書堂刊行」とあることから、萬曆 39 年刊本で、やはり四知館楊麗泉の出版と思われる。建陽本には重印、もしくは重刻といった様々な出版形態があったことから、刊記を含めてすべてが原刻本のままとは言えない場合もある。しかし、四知館楊麗泉が萬曆後期に出版活動をしていたことを考えると、おそらく、「崇禎」二字の埋め木部分には本来は「萬曆」という元号があったのではないか。崇禎新歲も偶然に元年に当たったために新歲の表記を残したというよりも、元年を含めた崇禎年間の意味で無雑作に使われたのではないだろうか。

崇禎新歲の刊記は、『連科四書集註』（加賀前田家旧蔵、東北大学附属図書館蔵）にも見える。同書「孟子」巻七末に蓮牌木記があり、「崇禎新歲新安/堂余完初繡梓」とある。『連科四書集註』



(図版 22) 『太医院增補捷法醫林統要外科方論大全』(国立公文書館旧内閣文庫蔵) 蓮牌木記・本文巻 1

は新安堂余完初の刻本らしく、こちらは刊記内の文字に埋木の痕跡はない。余完初は、書林秀峰余良史の怡慶堂と深い関係にあるが、これは書肆に関する事で、本論とはまた別の事であるからここではこれ以上触れない。

天一閣本嘉靖『建陽県志』巻三には、書林地区の書肆活動は、嘉靖当時、毎月 1 日と 6 日に書籍市があり、全国の書商が集まったと記す(注 30)。

しかし、南京などの都市と客観的な比較から言及したという記事というよりは、地方志独特の書き方とも思える。国立国会図書館蔵萬曆『建陽県志』は、嘉靖『建陽県志』をうけて巻一「各鄉市集」に、

在郷一十六里鄉市各有日期、如崇化里書坊街、……每月俱以一六日集……而惟書坊書籍比屋爲之天下諸商皆集、次則……

と記す。嘉靖版と萬曆版との大きな差異は、萬曆版では、建陽の坊刻本の書目を具体的に列挙する点である。萬曆『建陽県志』における出版活動の進行を窺わせる記述から、建陽の出版に伴う資本の蓄積が見て取れる。それは、萬曆の『古今書刻』(国立公文書館旧内閣文庫蔵)に記された豊富な建陽出版物の記載と相応する。

社会経済史的に建陽での出版を見た時、建陽の書肆が正徳期から嘉靖期に官版の出版を委託されて出版していたとしても、坊刻本、つまり、書林独自の出版物から考えた時、嘉靖前半期はその資本蓄積期であり、この頃から出版に携わって利益を得、隆慶を経て萬曆十年代以降に商業資本を十分に蓄えて刻書を盛況に導いたと見るべきである。つまり、建陽本に見られる「萬曆新歳」は、上記の書誌的例証とは別に、出版事業の展開から考えても萬曆元年ではなく、主に 10 年代

後半から40年代までの幅で考えるべき記載である。この刊記表現に限って言えば、改元の初年とは見なさず、版元書肆が迎えた新たな活動期間を象徴的に物語る語句とすべきである。繰り返しになるが、『古今書刻』にある福建書坊から萬曆前半期前後に出版されたと思われる多数の書名の記載、或は、書林余氏一族の興廃例もそれを暗示する。

(6) 建陽の出版と南京の書肆—まとめを兼ねて—

以上、萬曆新歳の刊記を持つ版本例を挙げ、建陽刊本に見られる萬曆新歳は、萬曆新春の表記を含めて萬曆元年という特定の歳ではないことを論証してきた。最後に、この他の萬曆新歳の記述から、南京書肆と建陽書肆が業務提携をしていたという新たな視点に触れて、小論のむすびをしたい。

米沢市立米沢図書館に所蔵される『鐫京板買公図像水黄牛経合併大全』二巻には、「皇明萬曆新歳孟春月/書林聚宝堂唐溟洲梓」の蓮牌木記があり、聚宝堂が出版した時期を萬曆新歳、つまり元年とする。これは長々と述べてきたように、萬曆新歳を元年とするのは誤りであり、萬曆年間の刊行とすべきことはすでに論証している。その一方で、書林聚宝堂唐溟洲の存在は、萬曆新歳の資料以外にも別の資料、すなわち、南京書肆と建陽の書肆との業務提携の存在を窺う資料にもなりうる（注31）。

『鐫京板買公図像水黄牛経合併大全』二巻の版元、唐氏聚宝堂の唐溟洲朝相は、確証はないものの、同姓の南京の書肆唐氏の一門を連想する。しかし、刊記の形式、書名の「鐫京版」、序の「閩漳李和梅書于聚宝堂」から見て、聚宝堂は閩の建陽にあった書肆と推測され、南京の唐氏世徳堂等の縁者が建陽で書肆を開いていた可能性が考えられる。仮に、唐溟洲朝相が南京書肆唐氏一族であったとすると、建陽の熊雲濱が唐氏世徳堂刊『西遊記』巻十六の補刻などをしたことから、閩つまり福建で世徳堂刊『西遊記』の重刻もしくは重印されたこと、あるいは、その版権の移行を考える手がかりとなるかもしれない。

建陽地区で族譜を異にするいくつかの書肆が共同出版していたことは、『史記評林』（国立公文書館旧内閣文庫蔵）の刊記に、「後学熊体信・葉正華・書戸余彰徳全刊」とあることから容易に推測される。建陽に限らず、明代後期、南京などの書肆は、同一地区のみならず、広域に共同出版をし、販路を広げて展開していたこともわかっている。

プリンストン大学ゲストコレクションにある『鼎鍔葉太史彙纂玉堂鑑綱』にも、南京書肆と建陽の書肆相互の提携をうかがわせる記載がある。本書の巻一卷首に「建陽劉朝箴精校・金谿唐晟参閱」、巻四巻首に「建陽種徳堂精校・金陵世徳堂繡梓」とあることから、建陽の書林種徳堂と金陵の世徳堂との共同出版物があったことがわかる（注32）。本書の記載から考えると、版元世徳堂の主人が唐晟であることもわかる。また、建陽種徳堂は熊冲宇が主人、建陽劉朝箴は安正堂劉朝綰の関係者と思われることから、建陽書肆は地元出版関係グループの形で南京書肆と共同出版したともみなせる。同時に、巻一・巻四の巻首の校者・閲者の併記からみると、建陽と金陵で

共同出版が行なわれたようには見えるが、実際は、玉堂鑑綱は福建の人々が中心に編集・訂校したらしいことが推測される。ルシール・チア氏はプリンストン大の『通鑑纂要抄』巻六末の蓮版木記も挙げられつつ、玉堂鑑綱には「萬曆壬子仲夏月/唐氏世徳堂重梓」とあることから南京唐氏の出版と考えられる。しかし、世徳堂刊本で蓮版木記の刊記を持つ版本は他に寡見せず、版式を見る限り南京刊本ではなく、建陽で種徳堂、或は、安正堂との合弁によって刊行された建陽本ではないか、と想定される。管見で推測する危険性はおのずと戒めなければならないが、萬曆時代の初刻本で蓮版木記を持つ版本は、ほとんど建陽刊本に収斂するようにみえるからである。ただし、詹居易の『兩漢雋言』には、「萬曆丁亥」の蓮牌木記があるが、大型の南京版のような体裁であり、詹聖澤霖宇の『新刊禽遁大全』も巻首に詹聖澤の刊記を伴うが、やはり南京版を思わせる体裁である。従って、建陽版がすべて同じ体裁であったとはいえないが、蓮牌木記を持つ刊本の多くは建陽版としてもよいのではないか。

二地域の書肆の合弁による同じような出版ケースは、別の版本にも見える。『刻別太史彙選古今挙業文叢註釈評林』は挙業のための日用類書であるが、書名標題に「金陵書房周崑岡時見父繡梓」とあり、また巻末には「萬曆丁酉仲夏月、書林熊雲濱新梓」の木記があると言う（注 33）。つまり、本書は、南京の周崑岡刊本を建陽の熊雲濱が重刻して出版した書物であることがわかる。重刻の際、南京の書肆名を削らないことは、周崑岡と熊雲濱の共同出版か、熊雲濱が周崑岡から版權を得て出版したもので、いわゆる海賊版ではなかったと思われる。南京の版元唐氏・周氏と建陽の版元熊氏を巡る深い関係に最初の聚宝堂の例を含めると、かつて筆者が指摘した南京世徳堂刊の『新刻出像官板大字西遊記』を熊雲濱が重印、もしくは重刻した事例（注 34）も、南京と建陽との業務提携の一環と見なせるかもしれない。ルシール・チア氏や上原究一氏も指摘する（注 35）ように、建陽と南京の書肆の出版事業における協力は、小論で取り上げた集義堂・餘慶堂などの建陽書林黄氏も、著名な版元、刻工を出した徽州の黄氏とは、単なる同姓だけではない別の深い関係があった可能性も窺わせる。

明代、出版業界にギルド的組織があったかは不明である。しかし、山西商人、徽州商人などが会館を拠点に同郷の枠を越えたギルド的組織を持っていたこと、清代には幅広い分野の社会活動でギルドが認められることを考えると、江南、華南に及ぶ出版ギルドの存在を考える必要がある。

本稿は、2016年3月9日東北大学東北アジア研究センターの共同研究発表会にて口頭で発表した研究成果に加筆したものである。

本研究は JSPS 科研費 課題番号 25370040 の助成を受けたもので、その研究成果の一部である。

図版掲載に際し、国立公文書館、東北大学附属図書館、名古屋市蓬左文庫、広島市立中央図書館各位の御高配を頂いた。末尾で失礼ながら感謝申し上げたい。

注

- (1) 『広島市立中央図書館蔵浅野文庫目録』（広島市立中央図書館、2015年3月20日）73～75頁・浅野文庫本『新鍔京台輯訂全書便用一覽大宗』書誌紹介参照。なお、本論とは関係はないが、担当した『六書全書』解説に一部明白な誤記をしたため、注2の図録で訂正したことを付記したい。
- (2) 『広島市立中央図書館蔵浅野文庫漢籍図録』（磯部彰編著、東北大学東北アジア研究センター、2015年11月30日）207～208頁参照。本稿を完成した2016年9月29日、同様の趣旨を明代戯曲史の立場から萬曆新歳が萬曆元年を意味しないことを指摘した研究、台北の劉有恒氏による「明代声腔史澄清談-并回答『萬曆新歳』即『萬曆新春之歳』」及び「再談『萬曆新歳』非指『萬曆元年』」（『昆曲史料與声腔格律考略』；台北・城邦印書館、2015）が発表されていることに気付いた。劉有恒氏の研究は黄龍祥氏の「中醫古籍版本鑒定常見問題例説」（『文献』1998年第2期）によるところが多く、劉有恒氏に拠れば、さらに早くは、荷蘭漢学者龍彼得氏が明刊閩南戯曲研究の中で、1992年にすでに指摘されるという。筆者の本題に関する公表は2015年3月である。本論では、黄龍祥氏及び劉有恒氏がすでに示される資料と重複するものもあり、また論旨の結論も同じであるが、先行研究は建陽での出版が複雑であることに視点が欠落していること、南京などと建陽の出版が連動するという研究の新たな展開が見受けられることなど、従来の研究にはない要素も取り入れていることなどから、今回敢えて長年研究に携わってきた東アジア出版文化史の視点から、先行の優れた研究に補足の意味で公表することにした。
- (3) 通俗的日用類書の本格的研究は、酒井忠夫氏「明代の日用類書と庶民教育」（『近世中国教育史研究』、国土社、1958年）に始まると言えよう。
- (4) 坂出祥伸氏「中国日用類書の再補遺-大谷大学所蔵「明代日用類書」三種など」（『汲古』第47号、平成17年6月）参照。
- (5) 酒井氏は国立公文書館旧内閣文庫等の『萬用正宗不求人』を前掲注(3)論文(85～86頁)で紹介する中で、巻35巻末の木記には萬曆35年に余文台が刊行準備し、萬曆37年引文を後で補充して刊行されたと見る。巻十六の末に「萬曆新歳穀旦喬（下缺）」の木記があり、この巻は別本から補ったものと指摘される。のちに、小川陽一氏は酒井氏が欠けたとする刊記を「萬曆新歳穀旦喬/山堂劉少崗梓繡」と明示された（中国日用類書集成第五卷『三台萬用正宗』小川陽一氏解題、汲古書院、2000年）。東北大学狩野文庫本は小川氏の指摘される通り、旧内閣文庫本と同版であるが、巻頭の目録及び巻十六に該当する部分が欠けている。末巻の欠葉や全体の破損状況から、不全本のように見え、旧蔵者も巻十五末にある「十五」を墨で「十六」とすることから、古くから巻十六が欠けていたらしい。この三台萬用正宗巻十六に全く別の『書法叢珠』上下巻があるのが旧内閣文庫本で、その目次「書法門卷十六」の記載と対応する。本書には、お茶の水図書館所蔵劉太華萬曆35年刊記本（『鼎録崇文閣彙纂四民捷用分類学府全編』、『お茶の水図書館所蔵新成賞堂文庫善本書目』p1102）が存在し、刊記を「萬曆歳次丁未/劉太華梓」とする。劉太華と巻十六刊記の劉少崗とは、同じ劉氏で対応することから、本書はもともと劉太華刊本が先行し、その後、余文台が内閣文庫本のような本文の刊記に改め、「題萬用正宗不求人全編引」を加えて萬曆37年ごろに重版したのではないかと推察される。東北大学本は、お茶の水図書館所蔵劉太華萬曆35年刊記本とは同版ではなく、旧内閣文庫本の不全本のようにもみえる。
- (6) 酒井論文(81～82頁)『三台萬用正宗』は萬曆27年に刊行され、現存の明代の日用類書でも、最も古いものの一つとされる。小川陽一氏は、現存本中、萬曆25年の『五車拔錦』に次いで古いとする。
- (7) Lucille Chia氏「Printing for Profit-The Commercial Publishers of Jianyang, Fujian (11th-17thCenturies)」(Harvard University Press, 2002)では、「Appendix」で黄啓勝などの書林黄氏を扱う。ただし、出版物の具体的な提示がないので、翌年出版された方彦寿氏『建陽刻書史』（中国社会科学出版社、2003年）「7. 書林黄氏」348～50頁では、集義堂黄氏を含め黄姓書林の出版物を挙げていることから、引用はこちらに従った。
- (8) 方彦寿氏『建陽刻書史』「7. 書林黄氏」348～50頁
- (9) 謝水順・李琺氏『福建古代刻書』（福建人民出版社、1997）328～9頁、方彦寿氏『建陽刻書史』348頁
- (10) 沈津氏『美国哈佛大学哈佛燕京图书馆中文善本書誌』NO.0013（上海辞書出版社、1999）、8～9頁
- (11) 杜信孚氏『明代版刻綜録』（江蘇広陵古籍刻印社出版、1983）巻7。本書は、現在では、二次的な参考資料に位置づけられ、必ずしも依拠できる内容ではない。方彦寿氏『建陽刻書史』348～9頁「書林黄氏刻書」で、興正堂黄秀宇4種を提示する。その中で最も早い隆慶5年の『春秋胡伝』、萬曆年刊の重刊本を挙げるが、謝水順・李琺氏『福建古代刻書』328～9頁に拠ったと思われる。両者では出版年に多少の食い違いもある。旧内閣文庫本には、萬曆乙巳33年刊新賢堂刊本などがある。建陽書林黄氏の族譜『敕建潭溪書院黄氏宗譜』といった系図は確認をしていないが、黄秀宇を名乗る興正堂が、隆慶・萬曆に活動した書林という明確な根

- 拠は乏しいように見える。その一方で、筆者は興正堂秀宇堂刊『春秋胡氏伝』も実見していないので、それに疑念を抱くことも、やはり根拠が乏しいと言わざるを得ず、憶測は慎みたい。
- (12) 酒井氏前掲論文 115 頁、121 頁、123～4 頁、
- (13) 磯部彰「大聖寺藩旧蔵漢籍の研究」(『富山大学人文学部紀要』第 11 号、1986)、磯部彰『東アジア典籍文化研究』(塙書房、2013) 第 1 部第五章 86 頁参照。
- (14) 沈津氏『美国哈佛大学哈佛燕京図書館中文善本書誌』NO.0574、331 頁
- (15) 大谷大学神田文庫の『新鍔搜羅萬卷合併利用便覧全書』については、坂出祥伸氏「中国日用類書の再補遺—大谷大学所蔵「明代日用類書」三種など」
- (16) 酒井氏前掲論文 (133～134 頁) では『居家必要事類』(内閣文庫、萬曆 7 年水南居士黄希賢序刊) の封面には宝善堂黄氏とあり、酒井氏はその黄氏が序文を撰述した黄希賢にあてる。ただ、福建の書林黄氏として考えた時、黄希賢が書林主本人か、といった問題などをはらむ。黄師表・師正については、方彦寿氏「閩北詹余熊蔡黄五姓十三位刻書家生平考略」(『文献』1989 年第 3 期) 参照。旧内閣文庫本『史觚』巻首には「建安黄師表・黄師正 較」とし、巻十七末刊記には「建安 黄氏景晋齋藏板」とし、黄師表・黄師正が建陽の版元かは定かではないが、ここでは、方彦寿氏の見方に従う。
- (17) 杜信孚氏『明代版刻綜録』巻 1。方彦寿氏「閩北詹余熊蔡黄五姓十三位刻書家生平考略」に拠れば、黄正甫は、世茂公の子で、名を一鶚といい、字を正甫とする。子に国栄・国堂・国丙がいるという。ルシール・チア氏 (Professor Lucille Chia) “Printing for Profit-The Commercial Publishers of Jianyang, Fujian (11th-17thCenturies)” 288 頁では、黄正輔文宗堂を上げ、萬曆天啓の人とし、4 種の刊行物があると記す。
- (18) 『明代出版史稿』(江蘇人民出版社、2000) 第 4 章 86～89 頁、386～392 頁
- (19) 酒井氏前掲論文 102 頁、
- (20) 磯部彰「大聖寺藩旧蔵漢籍の研究」・『東アジア典籍文化研究』(塙書房、2013)、謝水順・李琺氏『福建古代刻書』257～8 頁、ルシール・チア氏 (Professor Lucille Chia) “Printing for Profit-The Commercial Publishers of Jianyang, Fujian (11th-17thCenturies)” 302 頁
- (21) 酒井前掲論文 121 頁「十二 故事関係の日用類書」に、『鍔音釈解魚倉故事』十卷 (萬曆新歲書林奇泉陳孫賢繡梓) などとともに紹介されている。陳奇泉は積善堂の名で『武林広記』(宮内庁書陵部蔵、萬曆 35 年序刊) 重刊している。熊成治については、ルシール・チア氏 (Professor Lucille Chia) “Printing for Profit-The Commercial Publishers of Jianyang, Fujian (11th-17thCenturies)” 168・295 頁など参照。
- (22) 酒井氏は「八 明代の日用類書」の「五 学海群玉二十三卷四冊、仁井田陸博士蔵」(84 頁) で熊冲字刊行の本書には萬曆三十五年序があると紹介する。謝水順・李琺氏『福建古代刻書』288～291 頁
- (23) 坂出祥伸氏『妙錦萬寶全書』解題 (中国日用類書集成第十四巻『妙錦萬寶全書』、汲古書院、2004 年)。方彦寿氏『建陽刻書史』(中国社会科学出版社、2003 年) 303～308 頁で、幾種かの萬曆元年刊本を挙げている。方彦寿氏が挙げる建陽の出版物の中で、『周易』『新刻明医考訂丹溪心法大全』『海篇玉鑑』は、いずれも萬曆元年刊とする。「萬曆新歲」などとあるのと同じ刊記の解釈による判断であろう。
- (24) 大谷大学図書館所蔵『学海群玉』は、内題を「新刊翰苑広記補訂四民捷用学海群玉」とし、萬曆新歲 [1] 版であると言う (『林山文庫目録』241 頁、同図書館、昭和 59 年)。未見であるが、刊記が「萬曆新歲」とあるゆえに、萬曆元年刊としたものであろう。筆者は不明にも『林山文庫目録』に『学海群玉』の記載があることは知っていたが、『汲古』第 47 号 (平成 17 年 6 月) に、坂出祥伸氏「中国日用類書の再補遺—大谷大学所蔵「明代日用類書」三種など」に詳しい解説があるのに十分には気付かず、たまたま本稿の追補を行っていたときに拝読して気づくにいった。
- (25) 注 5 小川陽一氏解題
- (26) 中砂明德氏「中国近世の福建人士大夫と出版人」(名古屋大学出版会、2012) 第五章 376～8 頁、(注 4) 坂出祥伸氏「中国日用類書の再補遺—大谷大学所蔵「明代日用類書」三種など」でも、萬曆元年を訂正するに際して、『福建古代刻書』にある種徳堂熊成治、号は冲字の活動時期を参照されたのではないかと。
- (27) 方彦寿氏『建陽刻書史』344～5 頁・書林詹氏西清堂
- (28) 高橋智氏『海を渡ってきた漢籍』(日外アソシエーツ、2016 年 6 月) 45 頁
- (29) 富山大学附属図書館蔵本・家蔵本 (ともに零本)。
- (30) 『明代出版史稿』87 頁
- (31) 南京書肆と建陽書肆が業務提携していた点については、(注 2) 『広島市立中央図書館蔵浅野文庫漢籍図録』馬経大全・牛経大全の付注で簡単に言及した。しかし、建陽や南京の版元が広域に他の地域の版元と提携し

て商業活動をしていたことは、ルシール・チア氏が既に指摘される (Professor Lucille Chia 'Counting and Recounting Chinese Imprints' "THE EAST ASIAN LIBRARY JOURNAL", VOLUME X, No.2, 2001, 秋号)。また、チア氏は "Printing for Profit -The Commercial Publishers of Jianyang, Fujian (11th-17th Centuries)" 'Part III' <5 The Jianyang Book Trade During the Ming> では、版元の家族の移住、婚姻関係などの視点も加えて、福建での共同出版についても既に指摘されている。この点について、筆者の知見不足であったことは否めない。上原究一氏が「明末の商業出版における異姓書坊間の広域的連携の存在について」(『東方学』百三十一輯、2016年1月)を公表し、詳しい研究を出しているが、ルシール・チア氏の研究の延長上にあるといえる。

- (32) その紹介者のルシール・チア氏は熊氏種徳堂、建陽劉氏の版元を示す (Professor Lucille Chia 'Counting and Recounting Chinese Imprints')。
- (33) 酒井忠夫氏前掲論文 105～106 頁、萬曆 24 年序、萬曆 25 年刊記と示す。
- (34) 磯部彰『<西遊記>形成史の研究』(創文社、1993)
- (35) (注 31) ルシール・チア氏 (Professor Lucille Chia) 'Counting and Recounting Chinese Imprints'、上原究一氏「明末の商業出版における異姓書坊間の広域的連携の存在について」